

30-Ⅲ-09

ヒト各種臓器におけるHumaninの局在

相磯 貞和¹⁾、西本 征央²⁾
 慶應義塾大学 医学部 解剖学教室¹⁾
 慶應義塾大学 医学部 薬理学教室²⁾

【目的】Humanin (HN) はアルツハイマー病に関連するアミロイドペプチド、抗APP抗体などによる神経細胞毒性に対して拮抗作用を有する物質として、Nishimotoらにより発見されされたもので、24アミノ酸よりなるペプチドである。また、その後、CaricasoleらはラットにおいてHNと同様の生化学的特徴を持ち、神経細胞毒性を抑制する作用を持つ物質を見だし、これをRattinと命名している。このようなことから、HNは種を超えて存在し、神経細胞死を抑制する機能を持つことが明らかとされつつあり、実際に、HNはいくつかのマウスモデルにおいて実際に神経細胞死を抑制するが明らかとされており、アルツハイマー病の治療薬の候補として注目されている。HNの作用機序については、Baxの活性化を障害することによる細胞死の抑制効果を有することが最近あきからになっているが、実際に生体内での分布、局在を含めて生理的な意義については不明であることから、今回、免疫組織化学的検索による、ヒト正常組織並びに悪性腫瘍組織におけるHNの局在について検索を行った。【方法】ヒト各組織並びに悪性腫瘍組織の10%formalin固定、パラフィン切片において、作製した抗HNモノクローナル抗体を用いた間接法にて、染色した。【成績】乳腺、前立腺などの腺細胞、消化管上皮細胞の一部、肝、膵、腎における導管の上皮細胞にHN陽性反応を認めた。また、悪性腫瘍組織においては一部の消化管癌細胞において陽性であった。【結論】HNは単に神経細胞の細胞死を調節するものとして存在しているのではなく、生体内の多様の場において産生され、今まで知られていなかった生理機能を持つ物質であると推察され、また、ある種の癌細胞においては悪性化に関わっている可能性が示唆された。

30-Ⅲ-10

再発、転移巣に無色素性の小円形細胞からなる結節が混在する眼瞼原発悪性黒色腫の1例

米山 寿一、岡田 真也、石井 英昭、工藤 玄恵
 東京医科大学 病理学第二講座

【はじめに】悪性黒色腫は通常、文字通り有色素性であるが、稀に無色素性例も経験する。今回、全身に転移した有色素性病巣とともに組織像の異なる無色素性病巣が混在する稀有な悪性黒色腫を経験した。その電顕像ならびに免疫組織化学的所見を中心に症例報告する。【症例】79才の女性。左下眼瞼の悪性黒色腫にて腫瘍摘出と術後CO2レーザー照射、化学療法が施行された。その後、再発し、左眼球摘出されたが、1ヶ月で死亡した。【剖検所見】左眼窩の再発部には8×6×4.5cm大の黒色の腫瘍が見られた。肝や肺など全身に多発性転移巣を認めたが、所々白色結節が混在していた。【組織学的所見】黒色部は豊富な胞体にメラニン色素が目立ち、大型類円形核と明瞭な核小体を持つ細胞からなり、典型的な黒色腫像を呈した。一方、白色部は短紡錘形核を有する胞体の乏しい小型細胞からなり、色素を欠くamelanotic melanomaを考えたが、形態学的にはsmall cell carcinoma, Ewing's sarcomaなど小円形細胞腫瘍との鑑別を要する形状であった。【免疫組織化学的所見】黒色部の大型細胞はHMB45陽性であったが、白色部の小型細胞部はHMB45, MART-1, LCA, Chromogranin A, CD56, S-100蛋白のいずれも陰性であった。【電顕所見】黒色部の大型細胞には成熟型メラノゾームを始めとして各発達段階のメラノゾームが認められた。一方、白色部の小型細胞には極少数の幼若なメラノゾームと考えられる構造が認められた。また、核内細胞質封入体(Apitz小体)や明瞭な核小体およびorganelleの分布、細胞接着装置のない点など、黒色大型細胞との共通点も多くみられた。【結語】転移先で原発病巣と異なる組織像と色調を示した眼瞼原発の悪性黒色腫である。白色部は組織像および免疫組織化学的所見において黒色腫を支持する結果が得られなかった。しかし、電顕的に極少数の未熟なメラノゾーム様構造が認められたことから、amelanotic melanomaと診断した。無色素性悪性黒色腫の診断が免疫染色で困難な場合、電顕検索が必要である。